

緑の雲

山下雅人



ニコライ堂傍坂^{わきざか}くんだりまたのぼる中大生はそこからはじまる

迷路、闇、無人教室すり抜けて地下学食にさざめきありき

留年は流刑に似たり 一切の関わり断ちて読む 「マルテの手記」を

「ファンキー」や「バロン」「田園」にたむろせり中大生も明大生も

カルチエラタンと呼ばれし風の街区あり激論、愛語羽ばたきにけり

やました・まさと 「短歌人」同人、現代歌人協会会員。1955年生まれ。79年中央大学文学部独文学科卒。85年「現代短歌における“私”の変容」で第3回現代短歌評論賞受賞。歌集『水上の雅歌』、評論集『世紀末短歌読本』など。

駿河台から多摩丘陵へと流れゆく緑の雲は青春の魂^{こん}

肩組みて歩む学生あらねども緑の雲は若き背に光^てる

青空と台地のぶつかる地平にて白門佇^たてり遙かなる門

白門を宇宙の門と思うまでこころ砕きて「狭き門」より入^いれ

多摩キャンパス偶景

明暗のなきカフェテラス うつむきてこころの砦^{とりで}つくれよ青年

アップダウンするモノレールに乗りながら屈曲の世を見渡す君は